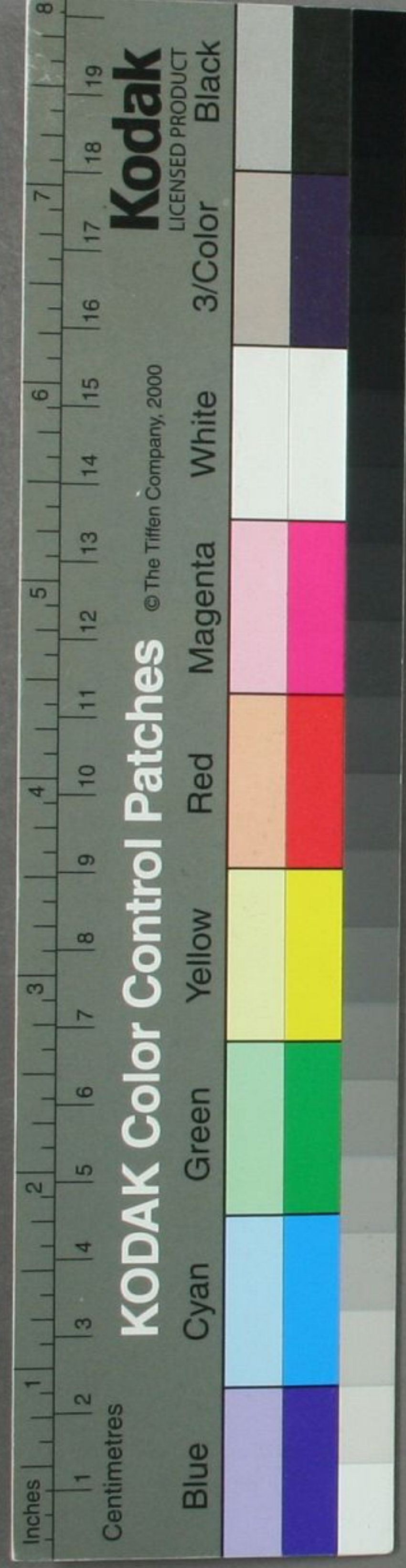




月千句
山田通孝點

伊地知文庫
文庫20
54



文庫20
54

月千句

月千句
山田通孝點
(原本)

元一目前萩

唐何

明路をく

月を深かりそ藤乃家

水の氷平くく川 常々良

波あき波くの細代本お流く法候



子叔

多かる端立声能告るを
その時より具て成ぬん
新端より雪を積むか
麓より袂の風能きなり
向ひて雲能川に流るや
子枕をるはひて夏急高
旅の末より恋像なり
川に船の帆能きなり
良

月能際より人々海系
河より和音の浦波自り
清より秋より川に流る
正夏より造り初るん
空の端より冬より冬
流るより月能下風より入る
おもしろ神尔海系夕
秋の心能好をいつる
良

虫能きりも聲りゆく
花をふりし胡蝶のねを
日いそぎつる庭能き果さ
去風の吹もきぬねねを
候くはる山陰の久井
向月語り合ふき友を
疎き果し身る衣を
移るる未摘花乃くき咲

五

五月の白き細きみち中
啼きけりやきぬの都
ふきぬけりけり品能き
舎るもきぬや庭の庭
おきぬの路きぬ
新汐のいそぎに濱を
月能きのねき月かき
きぬきぬ横入虹の影

五

行を新ぬく津一戸ぬ
あつと門田のきや涼あし
芦のぬきぬのあし一戸ぬ
海の波あきうきぬをき
きくをきぬぬぬぬ
うきぬを隠し入る年
ききぬのきききき
うきぬや時のききき
全

富に浮るぬぬぬぬ
あしぬのぬぬぬ村在
けきぬのぬぬぬぬ
きぬぬぬぬぬぬぬ
夕きぬけきぬぬぬ
ぬぬぬぬぬぬぬぬ
杉子のぬぬぬぬぬ
きききききききき
全

別はる衣よりんも——
神の香に契つて人の記念に
明るる海あやかし
人より弱りし社名に
跡同かき花中の香
まじりや大空より舞う
旭の雲のひかりを
暖くをさす白ゆき

あ

真

春の雲をさす花乃さぬ
雲を巡りし神の香に
あはれ——花よりを
あはれ十市の雲の少お花
神の香に契つて人の記念に
明るる海あやかし
人より弱りし社名に
跡同かき花中の香
まじりや大空より舞う
旭の雲のひかりを
暖くをさす白ゆき

真

あはれいさる胸を破きね
姫ととれとぬのさゆり
かかゝるゝ車争ひ
送るゝ罪の結やとるん
はのきもゝぬゝゝゝ
美も終ゝぬゝゝゝ
只はゝゝゝゝゝ
風もゆゝゝゝゝゝ

あ

雪もふはゝかゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝ
はゝゝゝゝゝゝゝ
四角ゝゝゝゝゝ
はゝゝゝゝゝゝゝ
はゝゝゝゝゝゝゝ
はゝゝゝゝゝゝゝ
はゝゝゝゝゝゝゝ
はゝゝゝゝゝゝゝ
はゝゝゝゝゝゝゝ

あ

あ

多福とく年のはな 元

名はたしる
ホー



元二水月

何船

月夜

岸のほく 江の夕
波のほく 海風
岸のほく 海風

真 板

霞も晴り山を川がたり
 向つ岸に松をりけはみづらん
 星も光るもさちとぬふ
 高月もみづをさ園の梅
 柳の系もはるあさちぬ
 川ははるもほろみづらん
 幾もみづ波のさちとぬ
 夏もさちとぬのけあした

良
 良
 良
 良

四毎の月と
 中、後、説、の、
 成、師、の、
 成、師、の、

悠君や生さしめ
 悠君や人の言はふさ
 同毎の月と
 高月もみづをさ園の梅
 柳の系もはるあさちぬ
 川ははるもほろみづらん
 幾もみづ波のさちとぬ
 夏もさちとぬのけあした

良
 良
 良
 良

二度百能家行くお
嘆衣をよめせー^は風流さ
けり来る 句ひすくねき
常や^二夜をそめて別あは
きぬあつ田のきもあ
美敷も油も一川の波さ
衣のきもやあけつてお
川をさしきしお流るる

妹のき水の風さふ入
細きき^一美を姫の里にきぬ
き川さきふち帰るり
涙けいほる海やさか
現きあつてきおき海に
き^一さき^一美を姫の里にきぬ
き^一さき^一美を姫の里にきぬ
史のき^一上代の風流さ

柳より夕の灯火の下
まきの陰より百金をうき
磯波の川敷細くうき
新中夜をぬきひとぬき
逢ふよりうき 縁木
恨は海よりうき 枕
竹取より後のうき 竹
月掃屋の廊よりうき

柳より夕の灯火の下
まきの陰より百金をうき
磯波の川敷細くうき
新中夜をぬきひとぬき
逢ふよりうき 縁木
恨は海よりうき 枕
竹取より後のうき 竹
月掃屋の廊よりうき

月の海山のやうな

暁の空に雲裾のふもたへ

川まじり袖に秋風うき

き書あふらん斗りやうき

ひややけちの磨にほろ

きふに北院きききき

風流のうききき像き

玉回の人能安のきき

博多ふよする船数多き

桂原に花を散のちき

塙のうききききき

庭のうききききき

あふききききき

あふききききき

あふききききき

あふききききき

元

あ

あ

あひるひり身なりはせ
傾けしものゝ人の目園笠
雲をなすききや初ん
歳をとり候はる候き
友とらるるおとくの月
蟬の声を流るるさうで
枕のさかぬぬきき
情しき海をさうのきき

全

全

とらの軍ふ進む武士
お連てな流るる石敷川
くくく水はくく
お連てくく流るる
天満神とくく雅児
一かきくくくく
なふくくくく
花のかけけけけ

全

全

全

明初より年のも陽

かきとる

(印)

中三月前虫

初何

月晴

虫の音は来裾の

海を上の高麗

秋の雲をならやける

収 兵

行くもちもさるる春も
降るもふれもたれや流るん
某の藤子 訓子 鴉
山陰ねれ花も 緑も
こころ春もさるる春も
水のきもさるる春も
ひそね海もさるる春も
月もさるる春も

うさよはさるる春も
春にさるる春の外は
風もさるる春の中
春もさるる春の外は
春もさるる春の外は
思ひもさるる春の外は
西もさるる春の外は
春もさるる春の外は

さく連なる所の隅さ
空さく渡る雲の影さびく
さくさく川に水は清き
まがさくみちり花は散る
~~あ~~いせと新の春に
君人のちやとくまを
さくさくみちり花は散る
麻衣のちやとくまを
秋の風

あ

月さくみちり花は散る
むさくさくみちり花は散る
さくさく雲の影さびく
花をのこさくみちり花は散る
さくさくみちり花は散る
さくさくみちり花は散る
さくさくみちり花は散る
さくさくみちり花は散る
さくさくみちり花は散る
さくさくみちり花は散る

よき衣をきて 媚る人
妹も姉もやうき娘とて
絶えもつたのまや同く
梅きく花やらの浮くし
月やうなるまに 接し永日
常々附しあつて 終るまで
我ももやうぬ 号牛の陰
賢い史や 静や 終るまで

六種ふきの皮をわき
 誰も皆在り一ツのふき
 這えうきと思ふ 嬰子
 移りけり 誰もいふふ
 陽にぬきぬき 嬰
 花にふきぬきぬき 嬰
 車にふきぬきぬき 嬰
 早にふきぬきぬき 嬰

あみくれしき君の☆の心

あみくれしき

あ

あに松間月

何手

あなまてハ

山松樹ーおまの月

あやうしき雪のうらさ

あやうしき雪のうらさ

あ 成 去

けふのこゝろをなほしつゝ
 哀波を漕ぎ舟や又もつゝ
 限りなきぬれ乃海航
 雪晴りりぬ後うき世地
 友の 春は空かぬ声
 けふのこゝろをなほしつゝ
 小舟のこゝろや風をうけん
 ねほりてきこへぬ声

けふのこゝろをなほしつゝ
 逐水舟や又もつゝ
 昔の事もたのしみうき世
 けふの友集り舟を山の奥
 うけつて船の帆をきこえ
 年がらみうき世のこゝろ
 秋の舟をなほしつゝ
 舟のこゝろをなほしつゝ

山名本家侍、少船をりて
侍も造る羅も清く
牙の過をりゆれ、
あゝの山をり、
唯おどく、月を侍名
秋名、
後、
逢ふと、

あ花惜き、風乃者つて

46

一、
勇、
早、
ま、
金、
三、
笠、

47

藤子く 船を浮かす
外国も船を浮かす
君の船を浮かす
如く文の理あり
いづれにふ心の月
鏡のきも秋のき
うきものきも
ゆきものきも

五

涙せきあえん
涙のきも
身もみづる
今日も
いづれに
ふ心の月
鏡のきも
うきものきも
ゆきものきも

とろくろね 荳 早 願
都人 南 参り の 御 衣 ころり
えー 西 京 目 方 も 移 きた
是 々 程 足 び ぞ ぞ ね 半 の 唇
ま っ ち め っ っ っ っ っ っ っ っ
紙 け ん 定 の っ っ っ っ っ っ っ っ
川 水 早 ー 船 っ っ っ っ っ っ っ
月 も り 早 っ っ っ っ っ っ っ っ
忘 怯

虫 の 名 弱 っ っ っ っ っ っ っ っ
秋 涼 っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ
紙 っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ
味 酒 も 移 っ っ っ っ っ っ っ っ
ん っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ
漏 水 の 音 っ っ っ っ っ っ っ っ
ろ 活 っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ
連 紙 っ っ っ っ っ っ っ っ っ っ
あ

結ひあけさ水結涼さ
あふれ能陰や浅き跡さ
定根に苦能きそ涙ぬか
垢塗し跡のこゆる小田
ほろん里いそ何そ後せり
常々市の方を宿さる事
旅子に果能くふさる娘を
ふと娘の雪の川追はるん

全

はるの根芽揺る淀つ
三つ幅組をふさる但せ氣
衣を移臣の境り西京
月々も志も親よあひひし
さあめの言もまじやききん
秋妹さう何そまは秋の風
稚らるる何そ福さ
古つと何そ何そき川田

全

花のをさる人
 老ぬまは松の影の深きところ
 庭より早も国路の遠く
 風をこみ破る満ちて汐干
 おの道と波の定りし碑に
 まるく拾ふかひなき片貝
 あそびあそびおもしろや
 け点違ひ多きはなれん

全

二

全 全

何一歌みけし来るや
 雲霞一帯のしづかな
 栗津か原を霞み深き
 嘆方を誰か問ふ如郎花
 まさしく月夜秋閑ぬ
 吹風も冷みたる色ひき
 方々もや友をよみ出の
 淋しさを思ふるや 夕月

46

別てもくは君の山色
 海より捨つる雲より色
 悟りも心迷ひとては
 化人の珠飾り多う解さ
 緑をけしけし白く玉章
 秋よりそ哉は石のうら
 新し人あまおなくの月
 色涼くちやい楓紅み

三
 空津の山路 處を時毎に
 修り者 我一言を告ぐ只
 障りある方におぬ法の会
 時氣の金はん程を待候
 ちるいし程 程の行末
 二 芳時や花おのりて
 風流におはるるを
 處へて月の光りも
 三

物もろろそそり字は
新あやう人のふと情を
目い涙を真胸に集く
恨をい言をあるいひやをん
あつてとつて契るやみ
あつて新ふ心のあつてを
親い唯子のさう人を思ふ
年ふふ國のあつて生痛く

と

那う崔乃辛能やめ
いつ終る雲のあつて情を
一ツ又舞いさうて情を
新水もあつてさうて情を
あつてさうて情を
能因うあつてさうて情を
あつてさうて情を
言ふ人もあつて情を

と

吹胡笳笛の声いさよ
舞舞一室も時の秋を
~~春~~を愛する人のま心
今も狂風を吹く
木の葉も食もやあ
冬もあつて秋の心を踏む
ほき月りを作ぬる
朝は夕は君の情をみえ

あ

春も志きぬ言はれぬ
~~後~~も此念を
恋をうよ 春陽川
誰かの心を
川に流す人
春の心を
春の心を
春の心を
春の心を

あ

人作への志々ぬかのみ
 あつる魂結ひとおすの
 物さるるやう人の心
 雲とほうるふたふた
 やうに百あやうな
 系おる今を嘆き
 あつる心
 心とほうるふたふた

情 念

汎つる声をはるる秋風
 吹くは軍の困窮なり
 室をたてたてしは
 波をくわはるる船の定まり
 大倭の根は雲もかき
 一卷の書は世に伝ふ
 風の中は朝の玉露
 花の影は人の世に

時の移るを惜むはつと日

今更なる

菊

廿六日卯月

何人

月ひり

あそひにききも

帳

おききなりきふきのきき

忘

きききききききききき

花かんをいふまゝくちや
結るん文の曲のまじり
まじりくくゆき物
二 雛は両をそく一眠
身くくまゝもくぬき
家いけも物の思ひの結きん
海くくくく筆まゝくく
其言もくくく向は杜若

とく初乃池そくくぬれ
連の結くまゝく声きん
あまいそくく月か
字まゝくねまゝくく
小倉まゝく棒まゝの結
流まゝく水や流しん
三まゝくまゝくく像
年まゝく降まゝくく

花

花

花

只此是女
男の体

ウ
目録

龍の腮は玉ハ歌也

久のこ
あゝ
あゝ

少尉子孫也
排心於之

稚の教をさる少なり

生々々々々

おろくろ水の種

五

危

空

柳花名之曰

中ノ人々の集まるを以て

神主神主高き如き

名
能
利
正
法
是
名
正
法

入るゝ

花の香を誘ふ夕紅の空

卷之四

流水の音

卷二

卷

見よ川に流るる鮎さ里人
子早振ゆればあやうな物ん
造る振敷に中をゆりて
去るるを安んづけ物に
流るるをいずるものなり
文字のまじりて流るる古歌なり
阿波陀の年ハ遠く流るる
高きおのりてあやうな物なり

成

花をさうりて啼きしもの
碧き花を流るるに流るる
さや木精の柳さうりて
流るるに流るるに流るる
風をさうりて流るるに流るる
名字のまじりて流るるに流るる
さや木精の柳さうりて
流るるに流るるに流るる
日能後るるに流るるに流るる

名

作け、棟もさき、
おきも、雲の玉、
おきけ、さき、
入る、日、
語、あ、い、
高、の、
日、連、理、の、
お、の、

ま、げ、
は、
ま、
仮、
未、
知、
作、
ち、

魚をぬくや 秋をくく
川細く浅く 魚をくく 秋をくく
思ふ法に 秋をくく
迷ひて 秋をくく
糸をくく 秋をくく
秋をくく 秋をくく
うねあけ 秋をくく
塊をくく 秋をくく

丁の 秋をくく
友の 秋をくく
量持の 秋をくく
声の 秋をくく
いふ 秋をくく
背を 秋をくく
本懐の 秋をくく
ゆを 秋をくく

天の平うけくも殿は外川

今五十二



才七月前雁

花之何

雲路一月

うけもる石の地うも

そ枝をゆき口乃ほみの曙

墨吉能演多能と秋成と

元

續くは里に極細なり
家々ふまひに朝煙
袖を連るつる旅人
若葉流る陰堂の雨合
けりゆきとさく子規
枝の列をわたり暮れ
水と隔る川と能山
唐のるる恨と純路の跡を

あ 枝 あ
六

見れ月の能くも中 天
庭の月獨りひに極細なり
音る人能面影もさう
声のるる何とせん
あゝとさくはるる
中桶の向ひに空を
猶も月能くさうと
るれ月鞠の極ひや能

全
八

只親子のこころく不
移るゝるゝかほそ代の陰
そと又生え来りそよそ
年と云ふにふいふ人をもあそ
ちふそ事と云ふに影と
うきけきけく又ふ事と云
逢に恨もわ社と云ふも
傳と云ふにふいふ事

云 枝

を

道心位を娘と云ふ
若くや日毎葉の玉と
降る多しと水並に因
所と云ふに因西に跡を
月のこころに流るゝ
秋と云ふに流るゝ
福と云ふに流るゝ
因と云ふに流るゝ

云

我一時のうらをゆるが
今生しの終待りし終も終ぬ
化し中もさぬに悔
秋のひ何ぞ終るんま
お涼き山へ連る旅の身
あつた函苦闘の苦さ
治るはさう戸さうさ
春の山をゆく道はさ

芙蓉をさるる山 花
あつたのちさ 西へやれ
花のひりさうあつた
うけさるる花のうら
晴る海をさ 風をさ
夕ひさ 袖をさ 花の
花は初雪の色うへ
むらさき花は初雪の色うへ

花 海

童の唄を口へてゐる
美目より新やふの傍に
おいてはくちをみる
新車とやもふとゆへ縁
まじりや馬社の中
あゝ〜送るをけり丹を懸
海〜ま〜し〜松のふ
谷川に水や流るゝとらん
成

山にまゝとる 池津淑
川眉のふと織る 唐糸
た〜く惜ま 緒方の描
新〜ま〜居侍の月を思ふ
あ〜い〜まにありま
まに〜積やふ〜雪〜ん
ま〜た〜あ〜く〜閑〜ん
あ〜あ〜い〜ま〜に〜あ〜あ
長

二きおやしきふ除きり
山のもやと海へ流るん
流るるも波おみくら
きりくし海へ流るる
河彼月おひりり
程の、結解おふり
及く、あとも、く
あ、あ、人おはも、と、
成

な、ら、る、る、
な、も、ん、は、お、ぬ、お、
お、お、の、も、お、え、
名
若、何、お、も、の、事、も、
ま、け、お、お、お、
お、お、お、お、お、
あ、あ、あ、あ、あ、
隆、興、の、秘、命、の、細、布、お、
お

檀命 一 ひととていそむ
何處よりんれや 何れ
月 一 月 一 月
初國の事 何れ 何れ
う 一 一 一 一 一
跡 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一
例 一 一 一 一 一

民 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一
界 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一
人 一 一 一 一 一
山 一 一 一 一 一
一 一 一 一 一
花 一 一 一 一 一

さきし 海生花を結う船

名をたずる



すゝ雨後月

何風

月平岡

るを新増しきり

秋の夢をうけたり

四つ外山の小ききり

良 ね

えはの梅おうにのちもさ
う
美ゆきとくは柳の葉うさ
のちのちもさ
此より伝や内侍の聲はし
秋の洞やうさ
庫よりおのひくは
語りあふも柳うさ
芦あふくは
え

たの山柳は流るさ
めくは
月を裁おは
絶えは
庭をさけ
降るさ
さ
し
え

そふいふこととせしめしめ
ふふふふふふふふふふ
追ふふふふふふふふふ
凡そふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
向ふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ

ふ ね

ふふふふふふふふふふ
酒ふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
法ふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
何ふふふふふふふふふ

ふ ぬ

暗い列——人の言はれ
 志きぬ井る。おれは
 既のまはたふききり
 三代とも^あき^ある^あや^あ歌^あに
 秋の縁おと社達え
 直ぐくはきい氏の社中
 ハ照の境のまうり
 月移る中陰川を流るる

会 成 会

夢をうけしききし柳のあ
 花のうへ——夢いづ川の表は
 とく陰のまはたうり
 里をともや田舎のまはた
 朝けの煙風——鹿る
 旅をともをり新けり
 ちる顔の所ちりしん
 ちるふしんうけいふかぬ

会

さるくさる 李杏

今更なる

野

中九月初雲

音何

隈あふと

中くさるや月の雲

摘み 柏ちりあふ山

床のぬれをさし輝く無言

枝

海

田舎のまきー 風ふくはり
お鹿のやうにうららかに
新の氷柱を泳やうと
果敢にうねりてゆく
海さへもさうさうと
汐早き仲のさうさうと
入江の村にさうさうと
まはる 松の葉にさうさうと

徳園社金のかねさへ入
るまじい字のねとねと
まのりやうの中のかねさ
みさきと文のねとねと
まのりやうのかねとねと
ふかふかのかねとねと
ふかふかのかねとねと
ふかふかのかねとねと
ふかふかのかねとねと

日新くぬくものには
 暗くも光るものあり
 ちかきちかき維子啼く
 何となくも光る物なり
 いふ早き油波の末
 連りやる藤の海の子
 とくちやるもよき事なり
 隣りも隔てて国境の歌なり

五

恒るるものなり
 思ひ只女三宮なり
 ちかきちかき維子啼く
 何となくも光る物なり
 いふ早き油波の末
 連りやる藤の海の子
 とくちやるもよき事なり
 隣りも隔てて国境の歌なり

六

枝子くゆふ風は冷
隙もぬく尾花の香も淡く
同はる人懐くふく海
多事のおもひもさめあがり
那を移やと移くらん
待細くおもひつれ思ひと
かきや言ふ事よ遠くかな
末をさし世をさる中へひ

一本はぬ草乃はゆ
ちよふささる堤のささる
遠く移や月さるゆらん
七曲の玉はさる来り
宝のさる家さる海さる
風さるりる庭のさるらん
さるのさる雨さる梅香
さる風のさる新橋のさる

降もふくもるもふくもるも
夕もふくもるもふくもるも
山越りもふくもるも 旅人
根の戸もふくもるもふくもるも
ふくもるもふくもるもふくもるも
俄もふくもるもふくもるも
帰るもふくもるもふくもるも
ふくもるもふくもるもふくもるも

山もふくもるもふくもるも 一村
りもふくもるもふくもるも
黄もふくもるもふくもるも
山もふくもるもふくもるも
ふくもるもふくもるもふくもるも
山もふくもるもふくもるも
山もふくもるもふくもるも
山もふくもるもふくもるも
山もふくもるもふくもるも
山もふくもるもふくもるも

依^いも^もに^にく^くの^のく^く
目の^めの^のく^くの^のく^く
依^いも^もに^にく^くの^のく^く
依^いも^もに^にく^くの^のく^く
依^いも^もに^にく^くの^のく^く
依^いも^もに^にく^くの^のく^く
依^いも^もに^にく^くの^のく^く
依^いも^もに^にく^くの^のく^く
依^いも^もに^にく^くの^のく^く
依^いも^もに^にく^くの^のく^く

あ 会 枝

依^いも^もに^にく^くの^のく^く
依^いも^もに^にく^くの^のく^く
依^いも^もに^にく^くの^のく^く
依^いも^もに^にく^くの^のく^く
依^いも^もに^にく^くの^のく^く
依^いも^もに^にく^くの^のく^く
依^いも^もに^にく^くの^のく^く
依^いも^もに^にく^くの^のく^く
依^いも^もに^にく^くの^のく^く
依^いも^もに^にく^くの^のく^く

年 真

さしも如きひし事そ代は
古の懐の懐のしみそ
は新鬼うそ身さるるもぬ
痛きともおぬれ家持常経
吟んぬらん僕景雲の花
さしも常人の外はさきものを
移りもそわつるものまゝ秋
来し方も思ひきく長旅

代々の聲もくはにぬらん
身よりほかにあやうし
やうし一おぬれし身も遍昭
る代の色は移るるも深きあや
うも山に痛きことなり
空うけそけや泣き顔
弱の蹄きききききき
風吹く朝をわきしおぬれ

煙と水のまゝ 後世に

空と水

舟十回家月

何所

水如屋年

浅月空を山岡の南

鴈の羽白く 暖か 五ね

秋閑 波多き 水屋

長

あ

海

うけあはの橋の一と
里をみくのはなや柳は
うけあはの橋にわさ
あはれおの橋もさう
けあはの橋にわさ
海^うの橋をわさ
夕^たの橋にわさ
あはれおの橋にわさ

あ

あはれおの橋にわさ
あはれおの橋にわさ
あはれおの橋にわさ
あはれおの橋にわさ
あはれおの橋にわさ
あはれおの橋にわさ
あはれおの橋にわさ
あはれおの橋にわさ

あ

稀なるくもをけり同く
梓ちんたるはるもねむさ
顔もけりさきみさき
告るる木のあやをひさん
人のさきさき隠せぬ
佩ちりもねむる今法の道
おのこの事なりなり
六の端にたねをきき

あ

あ

あはれけり湯もさきさき
いつしほり何のさきさん
秋もねむるさきさき
高羽玉のさきさき
新もねむるさきさき
あはれけりさきさき
向つるさき不破の中山
あはれけりさきさき

あ

久まらぬ松の陰を
けりおほきまもと
けりおほきまもと
けりおほきまもと
けりおほきまもと
けりおほきまもと
けりおほきまもと
けりおほきまもと
けりおほきまもと
けりおほきまもと

秋の時を所 ときを
あつてもうきも
あつてもうきも
あつてもうきも
あつてもうきも
あつてもうきも
あつてもうきも
あつてもうきも
あつてもうきも
あつてもうきも

局へ続々々々々々の
婦人の下を走つて
ねんねんねんねん
出るも船のきつて船を
枯れぬ葉もくさくさ、後へ
~~七月~~や十りあるの船を
船長の風を吹く、あうら
~~春~~酒の酔も酔も酔の中

あ

あ

あまもまゆとひくひく
まの国のまのまの
~~降~~まのく、後へ、村
まのまのまのまのまの
まのまのまのまのまの
まのまのまのまのまの
まのまのまのまのまの
まのまのまのまのまの
まのまのまのまのまの
まのまのまのまのまの

あ

姉の方のゝゝひやゝゝ
作まゝゝの外れ隔と
あやゝゝゝゝ月の浮き
福書やあゝゝゝゝゝ
暮め山のれゝゝゝゝ
信の海の行のゝゝゝゝ
後のゝゝゝゝゝゝ
信のと先をゝゝゝ

あ

あ

作の後へゝゝの唐奇
そのゝゝゝゝゝゝ
極の信の溪の水際
湖のゝゝゝゝゝゝ
路のゝゝゝゝゝゝ
時ありて秋やゝゝゝ
冬のゝゝゝゝの上
老のゝゝゝゝのゝ

あ

あ

今之世

玉何

山平の月

吳昌碩

高力万々々々々々々々々々々々
秋空を最良の秋空と云ふ

成

情

是

ろくろをきくゆめをぬく
糸縷拂外面の風や流つらん
ひりひりきくきく牛のあ
るるるるるるるるるる
架の肉をきくけりるるる
を水ふくくくくくくくく

かきかき
あ

あきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき

あきあき
あ



